みおやの光

念佛の巻

前篇

念佛とは佛と離れぬこと……一
念佛心……四
今現に此所に在す……四
靈體は色心無碍……五
ミオヤの恩……七
光明遍照……九
靈性の孵化……一〇
如來の德と法……一二
恩寵の體現……一三
自身は罪惡の凡夫……一五
彌陀大願力の增上緣……一五
人格を造り揚ぐる念佛……一六
眞の幸福……一七
意志の信仰……一七
信樂……一八

後篇

起行門……一
宗教的倫理……八
宗教行儀分……一一
恩寵喚起……一二
恩寵開展……一三
四正勤……一九
四神足……二四
信仰要素……二八
信仰根……三〇

念佛とは佛と離れぬこと

念佛と云ふことは、佛と二人にて、常に離れぬといふ意味である。念と云ふ文字は人と二と心にて、即ち二人の心となる。そは念頭に繫ると云ふ如くに、念頭に繫るとは何物か。自分の外に他に或物が在つて、其物が常に念頭にあり、また其胸臆に往來して離れぬといふ意味である。例へば世に孝子が常に父母を憶ふて、念頭に離れぬ如きを云ふ。詩經の中心之を嘉せば何の日か之を忘れんと云ふやうな具合に、始終其念頭に在つて離れぬことを念と云ふ。今念佛とは、自己の心の中に、今後世を通じて生命を献げて信賴する處の彌陀尊を、常恒に念頭に戴きて離れぬことを念佛といふ。即ち佛念ひの心である。すべての神や佛に立ち超へて絕對的に尊き如來を頭に頂戴いてゐることである。觀世音菩薩の御頭に常に阿彌陀如來を戴いて居るは、其の意味を表徵したのである。

一

二

觀音菩薩はすべての念佛者の先達にて、念佛する人は斯樣になれとの模範を示しされたのである。觀音菩薩は頭惱に(精神に)彌陀如來が、威神光明赫々として照鑑し給ふので、胸裡には彌陀の慈悲に充滿されて在ます。何人も彌陀の慈悲の光明に満たさるゝ時は、大小はあれ、觀音菩薩となるのである。觀音菩薩の念頭には彌陀如來が離れぬ。彌陀の光明に靈化せられた人格が即ち觀音である。念佛衆生は生れたばかりの觀音である。

念佛者の心頭には最も尊き、最も賴もしき彌陀尊が、常に直正面に在ますを念ずる時は、譬へば肉眼にて人の面貌を視る如くに見へぬからとて、心眼の前に威神光明の如來が實在すと念ずる時は、肉眼にて見へる人に對するよりは、優に尊とく有りがたく思はるゝ。元より眞の如來は肉眼にて瞻むべきものでない。觀經に、如來は是法界身にて、一切衆生心想中に入りたまふ、と。また曇鸞大師は、法界身とは肉眼の對象ではなくて意識の對象である。言を換へて云へば、心眼にて觀るべきものである、と。如來は本靈體にして、何の處にも在さざる處なし。但し人の信心の鏡だに明になれば必ず影現す。たとひ如來の麗はしき相好身は映現せざるとも、如來の大慈悲心が心の鏡に感る時に、何ともありがたく感ぜらるゝに至る。

如來は本靈體にて色心不二である。色心不二とは、如來は一方よりは大智と大慈との心相にて、一方よりは妙色相好身である。故に衆生が一心に念佛して、信心の鏡さへ明になれば、若しくは妙色身、若しくは大慈悲心が感じらる。釋尊や善導大師は決して妄語し給はぬ。如來は一切の處に充滿し、內外一切の處に在ます。如來の心は我等衆生の中にも充滿す。故に一心に念佛して信心の鏡明かなる時は、必ず眞正面に在ます如來は影現す。又我等が胸裡に大慈悲充さるゝ故に、ありがたさと歡喜とが常に發動す。

念々念佛して、益々熾んに彌陀の慈悲を感ぜよ。

我等が歸命信賴の念頭に最尊なる如來光明赫々として眞正面に在ます。

三

念佛心

慈雲大師の繫縁門に、凡そ公臨私養縁務を歷涉するに、造次にも常に內心佛及び淨土を憶ふことを忘れざれ。譬へば世人（　）事に心を繫けて、語言去來坐臥種々の作務を經歷すと雖も、密かに前事を憶ふこと妨げざる如く、念佛の心又是の如くなるべし。若念數々攝還すれば、久々にして性を成じ、任運に常に憶ふ。楞嚴に、如來衆生を愍念すること、母の子を憶ふ如し。若し子逃逝く時は憶ふと雖も何爲んぞ。子若し母を憶ふ時、母子生を歷て相違せず。若し衆生心に佛を憶ひ、佛を念すれば現在當來必定佛を見ん。佛を去ること遠からず。方便を假らずして自心開くことを得。香に染る人は身に香氣あるが如し。此の如く心を繫く。

今現に此處に在ますことを信じて念佛せよ

經に如來是法界身、入一切衆生心想中と。如來は本大心靈態にして、一切の處に實在せざる處なし。**ミオヤ**は常恒に現に此處に在ますことを確信して、活ける**ミオヤ**に自己の全幅を献げて祈るべきなり。**ミオヤ**は實に此處に在ませども、自己未だ心靈に活きざる故に意識せざるなり。譬へば赤子が慈母の懷に懷かれながら、母の溫顏を見ること能はざるが如し。本より法界遍滿の靈體としては、現にこゝに在ますけれ共、信仰の心眼開くにあらざれば、瞻視し奉ることできぬ。如來は靈體なれば色心不二なり。**ミオヤ**は法界周遍大智慧態にしてまた週遍せる妙色相好身なり。大智慧遍照の故に妙色身も周遍す。

靈體は色心無碍

如來の御本體は全宇宙に周徧する處の絕對の大靈體である。是を經に、如來是法界身なりとは是である。大靈態は色心無碍にして、一方よりは法界周徧する大智慧光明

である。一面よりは妙色相好の身と現はる。喩に、宇宙全體が大圓鏡智であり、智慧の鏡である。物質の鏡は本明態である。其明態の中に、男女の影が映現する故に、鏡は全體明體であつて、而も全體影であるが如く、宇宙全體に徧する明淨なる鏡の如くに、大智慧光明が周徧しており、其れが衆生の信念に應ずる、**ミオヤ**は大慈悲の妙色相好身と現はる。其が如來の妙色身世間無與等の妙法身である。されば聖善導は阿彌陀身心法界に徧し、衆生心想中に映現すとは是の義である。故に宇宙全體即ち如來の法身の大靈態として、大智惠光明としての實在なれば、其の智慧周徧と共に、大慈悲も周徧す。大慈悲周徧するが故に、慈悲の現はれなる**ミオヤ**の慈悲の妙色身も一切の處に周徧せり。只一心に大慈悲の**ミオヤ**を信樂愛念して止まざれば漸々に自己の心靈發達して、頓ては大慈の父の**ミカホ**を拜見し奉ることを得らる。大慈悲の**ミオヤ**吾目前に在して、我を愛念し給ふことを信じて念々に佛を憶念して止まざれば、大慈悲に薰發せられて、吾らの心も**ミオヤ**の慈悲に愛化せられて、**ミオヤ**の如く御慈悲に滿されて、日々の精神生活をえらるべし。されば經に斯光に遇ふ者は三垢消滅し身意柔輭に歡喜踴躍して善心生ずと。

如來の靈體法界に周徧して、我が身心にも滿ちたることを眞實に信じて一心に念佛して活ける**ミオヤ**と恒に對面し、眞正面に**ミオヤ**は在ますことを信じて、心に念佛して佛化せられんことを祈り給へ。是れ今日一日の向上を忽緖にすべからざる所以なり。

ミオヤの恩

今我此身はオヤの賜である。此頭の髮毛より足の爪先に至るまで、オヤの讓りならざるはない。胎內十月より、產出されて或時期までは、悉く親の手を離れては、活くることは出來ぬ身であつて、此の親の上に又た大きな**ミオヤ**が在まして、人なる親に子を預けて、人の身を受けさして、**ミオヤ**の聖意に稱はしむる身と成さん爲に世に出して戴きたることを思へば、吾らは人生の大**ミオヤ**に負ふ處の恩と義とを感ぜざるを

得ぬ。

興教大師の釋意に曰く、天地萬物は法身如來の體、地水火風空識、即ち物と心との二は一體の如來にてましませば、一切衆生の身と心とは同じく如來の一分子なり。

然れば如來は一切萬物の大ミオヤにして衆生は即ち其子たり。

天地萬物は如來の全能全智によりて活動せり。日月星晨あらゆる天體、地上の萬物山川大地草木礦土有情非情一として如來の全能を離れて存在すべきものにあらず。

一切衆生は如來の分子として其自性は清淨なれども肉我の煩惱に覆はれて染汚罪惡深き生物となれり。

故に衆生心は靈と肉との兩性を有し、無明の闇は迷て生死にさまよひ六道に流轉す。

凡夫の心は本性隱れて惡と罪と惱とを具す。

無明の爲に惑うて罪業を作り六道生死の中に生れては死し、死してはまた生れ闇より闇に入る。如來はかゝる迷ひたる衆生を憐みて、法身の一大靈力より報身彌陀如來と顯れ光明名號を以つて衆生を攝化し給ふ。

阿彌陀とは、衆生を光明の中に攝めて、無明の闇を照し、苦を拔き樂を與へ、惡心を化して聖善の心にせんとの思召を以て、アミダ佛とは現はれ給ふ。

衆生一心にミオヤの聖名なる光明の名號を稱へて、一心不亂なる時は如來の慈悲と智慧の光明によりて精神中の苦を拔き樂を與へ光明中の生活となりて如來の聖旨にかなふ。

光明遍照

萬物に光熱を與へざれば一切の星宿世界には生物の生成は出來ぬ、生存もできぬ如く、報身の光明遍照の光明を以て法身より生じたる一切の心靈を開發し靈化して如實の眞理を自覺せしめ、圓滿清淨の德を成就せしめて、一切を成佛靈化せしむる靈德を報身と云ふ。

故に報身佛は天の太陽の如く、一切衆生を光明の中に攝取して靈化する處の神尊である。故に天尊と云ふ。宇宙最高至上の天尊である。光明赫々として普ねく十方を照す。此光明に接觸するものは悉く解脫し靈化されざるなし。是十方三世一切諸佛賢聖の共に恭敬尊崇する處、故に最尊第一者とす。いかにとなれば、如來は無量無邊等の光明を以て衆生の惡毒を解脫し靈德を成じ給ふ。三世一切諸佛は悉く此光明によつて解脫し靈化して成佛し給ふ。故に一切賢聖悉く稱揚讃歎せざるなし。經に無量壽佛の光明顯赫にして十方を照耀す、諸佛の國土に聞えざることなし。一切諸佛聲聞緣覺諸の菩薩衆も悉く共に歎譽し給ふこと亦復是の如しと。

靈性の孵化

宗教の客體として吾人の宗教心に對する大靈力の無くて叶はぬものは三身である。

法身は宇宙の全體と法則と能力とにて、此によつて衆生は此本源ありて生產來て現に活きつゝあり。法身から受けた靈性の卵は報身の光によつて孵化せらる。報身の無量光明が衆生の心靈を攝めて孵化し給ふ能力は十方界に徧照するも、若し應身の釋尊が世に出でて懇切に敎へ給はねば、衆生は自分の力で其報身の光明を仰ぎて之に靈化せらるゝの眞理を知ることは出來ぬ。故に此三身は一を缺けても吾人の宗教心は成就せぬ。世界の人類は悉く本來斯の如くの佛性具有しながら、應身の敎を被らず、報身の光明に攝化せられざるが故に靈に活くることが出來ぬのである。

佛教にても報身の大光明に依りて靈に活べき信念の立ぬ宗教心は圓滿に完全な活氣がない。恩寵の感なく暖溫の活氣なく、例へば若し天に日光なくば、地上の生物が生存できぬ如く宗教心に對する心靈界の太陽なる無量光如來の光明が顯赫にして十方を照曜し、我等は常恒に此の大光明に觸感すること、恰も日光に此形體が照されて生存すると同じ。此肉體に於ても日光の直射を受る人と受ざる人との健康狀態は非常に相違すと云へり。

靈界の太陽の無量光如來の赫々たる光明の直射の下に靈活せる人は、靈に活々充滿し意氣陽に、一切の生活機能が活躍して實に常に靈に快然怡樂言ふ可からず。是如來の徳が獨り唯理性の寂靜なる光として寒月梅花を照す底の風流のみならんや、春風櫻花を催すの感あり。

如來の徳と法

一如と萬法との關係

宇宙は本來一眞如を體とし、一如の上に顯現したる萬有である。例へば如來は、自性は大海水なれば、一切衆生は其上に立ちたる波浪である。宇宙一切の萬有は悉く一如の體によつて關聯せざるものなし。

恩寵の體現

恩寵開發し、人格革新し、靈化の意志情操及び一切活動せる心を支配す。

いかに道徳自修して波羅密即ち彼岸に到達すべき。波羅密は常恒の過程不斷に勝進して、神的意志を實現的に行爲すべき性格に鞏固に練修せざるべからず。神聖正義の觀念を實現せんに、注意を緩むる時は、六賊競ひ來りて、劫奪せんとの二河白道の譬說の如く、貪瞋の二河動もすれば、心靈の白道を侵害せんとする勢を呈す。常に注意と勇健なる意志即ち心靈が、如來の觀念より出で丶、之を改むるに非ざれば敗北を免れず。外寇恐る丶に足らず、自己の主我に潛伏せる賊首を斷伏することを難しとす。

菩提心道徳自修し、從來の習慣を變じて、靈的性格實行を練習し六波羅密に如來の恩寵によりて、實行的道徳性を長養せられ、更に一歩々々に進みて、改善的に精進し、長養は能く心靈道徳心を長養し、性格の改善は心靈が機制我を制し情操を鞏固にす。

情操が更生の靈的生活と性格が改善の道徳的過程と共に連絡して全を得べし。心靈の稻を播き、耕耘を怠るときは目的である秋收好果を見ること能はず。

人は恩寵獲得せるも、機制のあらんかぎりは、罪惡の種子斷盡すべからず。故に常恒に心靈と我と健鬪をせざるべからず。恩寵を獲れば惡を制伏するに便利なり。惡の衝動は善の衝動を以て之を制し、靈と我との健鬪日々に新たにして、また日に新たならざるべからず。消極には我より出づる惡素質を滅殺し、積極には恩寵により心靈を益々增長せしめ惡欲望を抑制し、善欲望を亢進せしむ。

自身は罪惡の凡夫

自身は罪惡の凡夫自ら出離の緣なきもの唯彌陀大悲の懷に抱擁せられて攝化せらるの外なしと專ら本願の念佛を行じなされたし。大慈の懷に攝られたる佛の卵はいつか孵化せられて佛子の面目が顯れん。

彌陀大願力の增上緣

我らが胸中の惡魔は闇き處に伏す。彌陀威神光明の前には妨害ができぬ。闇黑はいかに深重なるも光明には敵することが出來ぬが如くである。光明の生活に入りたいと云ふ欲望が深くして一心に念佛する時は、彌陀の大光明が增上緣と爲りて之を妨ぐる所の諸邪業繫の闇は必ず消滅す。さうすると光明の人と爲るのである。

總ての煩惱惡業の障は彌陀大願力の增上緣に由りて消滅し、又彌陀の强き力に助け

られて光明の中に不斷に往進し、念々に佛道を增進し、漸々に完全なる人格に進むことをうるは是れ彌陀增上緣の力である。

人格を造り揚ぐる念佛

宗祖は三心も四修五念門も結歸する處はナムアミダ佛と示された。此念佛一行にて仕揚げた結果は即ち宗祖の靈的人格である。大切な念佛といふは徹底した念佛にて、宗祖に倣ふて靈的人格を造り揚げる念佛である。

五劫に思惟し兆載永劫に結びたる果實の念佛なれば、此佛種子を原因とし、常に念佛し、念佛の大光明を發揮して、光明ある人格となり、永遠にまで生命ある人となり普ねく一切に施し、平等に共に無量光の正覺を成じ、無量壽の涅槃を證することを期するにあり。

眞の幸福

世には靈の光に觸れてこそ眞の幸福を感ずべき事を知らで、唯肉の幸福のみを追ひ求め、人生は形氣の快樂を目的と想ひ、焦つて現在の滿足を捉えんとする族が多い。比々皆爾りである。

然るに現世界は決して彼等が希望を思ふまゝに容れて吳れぬ。餘りに幸福を希望する結果は、却つて反對に人生に不滿を感ずるやうになる。若し人は肉我の奧底に潛める靈性が開顯し、靈の暖かなる光の生活に入る時は、求めざるに自ら靈福を感じらる。

意志の信仰

意志の信仰として、彌陀の世嗣となり度い、佛國に生れたい、佛に成り度い、光明の生活に入りたいとの欲望が發らさるを得ぬ。

信樂

我ら信樂して如來の相好光明に攝せらるゝ時は永へに無限の靈光に浴しまた暖められ長養せられ開化せられ靈感不思議なることをえん。

起行門——宗教的倫理

宗教的倫理、即ち行儀分。宗教的過程は、初發心より終局目的即ち彼岸に到達すべき行路なり。即ち行儀によりて恩寵を獲得し、宗教の目的を達する行業。

至善圓滿なる地に達するの行路を波羅密と名づく。

心理論に所謂る人の信仰と如來の恩寵によりて、智見を與へられ惡質を解脫し、靈化せられ、如來の目的に參與して、其分身としての行動すべきにいたるの行業。

佛陀一切衆生を敎化度脫するの要は、大菩提心を發さしめ、佛智見を開示し、佛の正道に悟入せしめ、無上菩提を證し、大涅槃を得せしむるにあり。

起信論。分別發趣道相とは謂く、一切諸佛所證の道、一切菩薩發心修行し趣向する義の故に、略して三種、

一、信成就位發心。二、解行位。三、證位。

信位は不定聚、薰習善根力あるが故に（遺傳恩寵）業果報を信じ、能く十善を起し生死の苦を厭ひ、無上菩提を欲求し、諸佛及法に遇ふて信を修す。信成りて正定に入る。如來種に住し、正因相應す。

信位、三心、一、直心。正念㆓眞如法㆒。二、深心、樂集㆓一切善行㆒。三、大悲心、欲㆑拔㆓一切苦㆒。

修行方便四種。一、行根本方便。生死涅槃に住せしむる智悲願行。二、能止。止㆓一切惡㆒隨法性、離㆓諸過㆒。三、發起善根增長。三寶を敬ひ其の護念を仰ぐ。四、大願平等方便、發願度㆓一切㆒。

二、解行位。眞如の理に於て、深解現前し、所修如實。法性體慳貪なき故に隨順して檀度を行ふ。乃至法性は明にして無明を離る。故に隨順して般若を修行す等。

三、證位とは淨心地より究竟地に至る眞如の境を證す。即ち眞如智を法身とす。一念能十方界に至りて諸佛を供養すと。

是菩薩三種微塵心相あり。一、眞心、無分別、二、方便心、自然徧行衆生を利す。三、業識心、微細起滅故。菩薩一念相應の慧を以て、無明頓に盡し、一切智を得て不思議の業能く十方衆生を利益す。

華嚴には形而上の論には、衆生が成佛の階級を論ずるに二門あり。一、次第行布門。因果次第進修證入の故に。二、圓融相攝門。因果融攝無碍即入の故に。行布を以て不可說不可說、微塵の劫を經。行布即圓融の故に一念速疾に佛果を證す。圓融行布を碍げず一念即不可說劫。即入無碍の故に。理論は斯の如くなるも、宗敎倫理即行儀分には、三生成佛の三階級をもて、初發心より乃至佛果に至る。一、見聞位。二、解行位。三證入位是なり。

華嚴善財童子は一生に證入して、普賢の願行を盡して成佛すと。

密には、一切衆生の身心本六大を體とせる大日本有の薩埵なれども、煩惱の爲に縛

せられて、自ら顯照するに由なく、諸佛の大悲善巧智をもて成佛の道を示す。成佛に自ら三位あり。

一、理具。即身成佛の第一位。六大無碍本有の理を確信し、如實知自心の佛なることを自覺する位。

二、加持成佛。行者の三業と如來の三密と相互に加持涉入し、入我々入、渾然として實際に一致し、即ち大我小我の融合する處、不自在が大自在の中に入りて、如來加持によりて即身成成するを第二位とす。

三、顯得成佛。理具加持の結果とし、心身の自在を得。已に加持力によりて、小我を轉生して大我の自在を得、自在の活動を即ち如來の聖旨を實現すべき行爲を顯得、圓滿究竟の成佛にして、靈化的自在の行動なり。如實に如來の三業を實現する位、自利利他圓滿なる處、又菩提心論には眞言法の即身成佛に菩提心行相を說いて、

一、行願。二、勝義。三、三摩地。

○

佛敎に自力他力の二門を立つる如き、自力門には知力の證入を重んじ、感情方面を措く如きは、宗敎としては何にしても一片を執せば、完全なる能はざれども、宗敎としては、心理の中心を感情に求むるものとせば、客體なる如來の恩寵によりて歸命信賴し、之が司導の下に活動する如きは、宗敎として活動すべき生命たり。故に宗敎修養の心理は、確乎たる客體即ち如來の偉大なる絕對的偉大なる靈格に絕對的に依屬し其の大なる恩寵によりて攝受せらるゝ。如來の法身解脫般若の德に加持せられ、此の恩寵によりて度脫せらる。即ち智の啓示と心情の融合と意志の靈化。

如來の一切慧は人の心靈を開示し、神聖正義恩寵としては、人を復活し、聖的人格として、其正しき光の中に生活せしむ。

此波羅密即ち彼岸に達する修行の過程に先づ三階級あり。

一、恩寵の喚起、(資糧位)

二、恩寵の開展、(見道)

三、恩寵の實行、(修道、無學道)

難思光　如來の斯光に對する人の方面を信仰の喚起とす。初發心に對する時に難思光と稱する所以は、

法佛萬德法界に周徧し、無諍の莊嚴も重々に徧滿すれども、衆生之を見聞すること能はず。甚深難思の境。起信論に、

如來は見相を離れて徧せざる處なし。心眞實の故に即是諸法の性なり。自體一切の妄法を顯照す。大智用無量の方便ありて、諸の衆生得解すべき所に隨つて、皆能く種

々の法義を開示す。是故に一切種智と名づくことを得。

又問うて曰く、若し諸佛に自然の業ありて、能く一切處に現じて衆生を利益せば、一切衆生若は其身を見、若は其神變を覩ん。若し其の說を聞いて利を得ざることなからん。云何ぞ世間多く見ること能はざる。

答へて曰く、諸佛如來の法身平等に一切處に徧して、作意あることなし。故に自然と說く。但衆生の心に依りて現ず。衆生心は猶ほ鏡の如し。鏡若し垢あれば色像現せず。是の如く衆生心に若し垢あれば法身現せざるが故に。

智論に法身佛は常に光明を放つと。

宗教的倫理即ち行儀分

(行儀によつて恩寵を得ること)

行儀分は即ち濟度の過程。初發心より恩寵を獲得し、實行により終局目的の彼岸に到達する行道は、之を菩薩の波羅密多と云ふ。人は本佛性を本能に伏藏すると共に、罪惡の垢質を具備し、本有の伏能を開展せざれば顯動態とならず。惡素質を脫却し靈化するにあらざれば靈的活動すべからず。之を解脫し靈化するは自己の力のみにて能くすべきにあらず、必ず如來の恩寵によらざるべからず。如來の恩寵は即ち眞理と智慧と解脫の三能を有し、如來が人の信仰に對する靈性を聖應また恩寵と名づく。

此の如來の靈性と衆生の靈性とは本質に於て一致すべき理性あり。宗教心理に於て聖靈との感應により解脫靈化するは、本如來の恩寵による。

一、人の心理方面に法身に賦せられたる靈性伏すること。

二、人性の惡素具備すること。

甲は理性にして啓示によりて開發し、乙は內容にして解脫靈化す。

如來の法身は理性の本質にして、報應二身は內容に對する客體なり。

衆生と如來との二者の關係は、一大法身の關係によりて、個人的靈性は開示せられ靈應によりて內容を感化し解脫し靈化す。

若し人に靈性伏能せざらんか宗教の能なく天然の惡素質なからんか宗教の要なきなり。

天然は劣態にして靈能を有するも潛伏態にして顯動せざれば、無しと同じ。信論に衆生佛性ありと雖、種々に方便して之を開發し顯動するにあらざれば、喩へば摩尼寶珠の琢磨して垢質を脫去するにあらざれば、靈性現前せざるが如し。波羅密の目的は天然の劣態主我の自己勝手より脫して如來の目的に協力し終局に至たらしむるなり

恩寵喚起、恩寵獲得、靈應によりて劣態より凡より聖となるには、苦修碎勵な

ると、苦修によらずして得るとあり。また頓速なると、漸次なるとの機あり。容易なることは導師の如く、難きことは、感師が三年苦修獲得せし如し。容易なること、碎勵なく聖靈を感じ更生するが如きは、素質遺傳恩寵已に豫備したること人の美貌才智を天賦に得たる如し。技藝及び科學にも不撓勇猛精進の結果は天才よりも遙かに勝れたる功果を獲ると同じく、一心專修專ら聖靈に意を集中し、外界の誘惑を遠ざけ、常に內面の修養をなす。苦修なく得たるは遺傳恩寵にして既往に苦修獲得に存す。

及一方には宗教の流布せる團體の中に恩寵の大氣中に薰染せられて、同じく如來の恩寵が團體機能にあらはれし、これは衆生緣の慈の如し。

宗教行儀分

如來の恩寵を獲得し、信仰を發趣すべき修行信心分、濟度過程。初發心より信心開發し終局目的即ち解脫靈化して終局目的に到達する過程なり。

人は法身の所生として、根底に本靈性を具備すると共に天然に惡素質具有し、之を開發し之を解脫靈化して初めて眞理の生活に入り、目的に參與することを得。解脫の能此に因りて生じ、修行の要これによりて起る。之を開展解脫せんには一に恩寵によるの外に道なし。三世諸佛、念彌陀三昧によつて正覺を成ず。

修行信心分、濟度過程を先つ三階級に分つ。

難思光。　第一期、恩寵喚起。
無稱光。　二　開展。
超日月光。　三　實行。

恩寵喚起

難思光とは如來法身絕對にして超絕甚深、言語に絕し思慮及ばざる所、報身深高にして凡の窺ひ測る所に非ず。

然るに衆生宗教的衝動あり、遺傳恩寵あり。

聖名によりて神的憧憬し、不識的過境的に靈的憧憬し、萬德果號一たび耳に歷れば聖種となり、識神に攪入して佛種となる。

恩寵開展

啓示によりて、知能致一、心情融合、意志靈化。恩寵開展の先驅として人の意識に入り來りて新らしき感發として從前の無明の夢を覺醒すべき初發の啓示によつて從來の忘夢覺醒し來つてこの微光に自己を返照する時は益自己罪惡の深厚なるを自覺し、如來に對する欽慕の心增進し恩寵の開展と解脫の要とを感ず。

無稱光の恩寵開展の對する客體を無稱光と稱する所以は、已に開發しては知見を與へられ機能致一、心情融合したる狀態は、冷煖自知、自ら證明し感觸するも、其の內容は言語を以て之を佗に詮表すべきに非ず。唯だ證の契合のあるのみ。故に無稱光と名づく。

恩寵の喚起、啓示の先發の微光に感じぬれども、未だ自己を省れば妄想の雲は續々として競ひ起り、罪惡の感情はつねに襲ひ來りて斷間あることなし。此に於てか恩寵開展の要を感じ、神に對する戀念彌々深く、これを妨ぐるものは理想と現實との衝突は自己の業障深厚なるによる。

始めに感覺的啓示を生ず。

導師觀經疏に、行者一心に靜慮に攝心するに、初めに業障を知觀すべし。五大皆空、唯有識大、湛然凝住、猶如圓鏡、內外明照、朗然清淨、此想成時、亂想除ことを得て、心漸く凝定す。然る後、徐々として心を轉じて諦かに日を觀す。利根なる者は一座に即ち明相現前を見ん。境の現する時に當つて或は錢の大の如し。此

の明の上に於て即ち業障の輕重の相を見る。一者黑障、猶し黑雲の日を障る如し。二者黄障又黄雲の日を障るが如し。三者白障、又白雲の日を障るが如し。衆生の業障も亦爾り淨心の境を蔽ふ。心をして明照ならしめず。三障除く時、所觀の境、朗然として明淨ならん。若し彼の境の光相を識らずんば、此の日輪の光明の相を看よ。行住座臥、禮念憶想して、常に此の解をなさば、久しからざるの間に即ち定心を得て、彼の淨土の莊嚴を見ん。乃至、定中に在つて此日を見る時、即ち三昧定樂を得て身心融液、不可思議なり。

又行住坐臥、身口意業、常に定と合せよ、唯萬事倶に捨て、失意聾盲痴人の如くならば此定即ち得易し。若し是の如くならずんば、三業縁に随つて轉じ、定想波を逐ひて飛び、縦令千年の壽を盡すとも、法眼未だ曾て開けず、若し心に定を得る時は、或は先づ明相現ずることあり。先づ寶地等の種々分明なる不思議の相を見ん。行者若しは想念の中、若は夢定中、佛を見る者、即ち此義を成せんと。啓示は感覺より抽象等、意識の進歩に随つてまた高等に進歩す。

感情解脱。

如來は神聖正義なりとの觀念によりて、自己の性惡を見ること、曦光東に昇る時、明了に萬物を照見するが如し。

是より進みて天然主我の情操を轉じ、如來眞我の中に安立せんとす。心情の苦惱と罪惡とは脱却すべき人の方面、苦惱の感情は主我幸福主義脱したる時、殊に苦惱は罪惡の種子脱する時、自ら脱却せん。罪惡を脱却せんには、先づ自己の煩惱の所在を識らざるべからず。楞嚴に、阿難汝が胸中の賊の所在を認識せよ、汝誤ちて賊を認めて子と謂へり、煩惱の種子潜伏して機會に應じて顯動す。

此惡の根本は主我なり。一切の罪惡の衝動是より出づ。次は怠惰罪なり。甲は未だ靈性に乖き、乙は不注意による。人は天性の惡には責任を感ぜず、我は種子の潜伏する之を認めて、其賊を排せざるべからず。

罪惡の自覺。自ら罪惡は認むるも之を脱却するは、自己に能くする處に非ず。此に罪惡に對する良心苦悶の感情となる。此苦悶は罪惡を脱却し心靈を開展する動機となる。人の最深の根底に潜める眞我は、如來の泉源より起る。自己の機制我が如來の聖意に衝突す、益々終局の如來に遠ることを恐怖し、過去を悔ひ將來を慮り、益々煩惱を深くす。罪過解脱の感高し。如何に己を改革し、自克推勵これが泉源を斷つには如かじ。爲に機制我を嫌忌、厭惡の感情となる。

罪惡の我に對して反應の意志と顯はれ出づる知情意の信仰は如來の恩寵に知見を與へられて、自己の根底たる如來の神聖正義を知見し、感情を解脱しては眞我の中に歸命し、融合し、意志は靈化、即ち情操轉換す。

佛陀、伽耶の道場に金剛石上に座して當に無明及び主我の罪惡の根底を脱却せんとする時に、一心金剛の如く、若し主我罪惡の根底を斷じ正覺を成せざれば、寧ろ此の身命を摧くとも動じとの意志の鞏固たること金剛の如し。時に當つて我に屬する煩惱の衆魔、競ひ起り、愛欲の魔女は交々入つて道情を妨げ、かつ幾多の妖姿と、我と肉より潜みて飽くまでに心靈の障雲となり、また十方よりは忿恨憍害の魔は可畏の惡相を現じて道意を侵害す。此の一切の魔の巨魁たる我王を滅殺するに非るよりは、爭でか罪惡の源を脱せんと、大雄健なる菩薩は、機制我の根底たる一大眞我の光明に依りて最正覺を成ず。

佛知見開きて天然の我起て一大眞我を發見し、朗然として無明永夜の夢醒めて、從前の主我滅殺し、心靈顯示する時、心情大我と融合し、意向一轉する處、即ち更生とす。また得道成正覺とす。

生死の源を斷ち煩惱の根底を截らぬ生死煩惱は主我に屬す。心靈は如來の根底に連絡して絶對なり。心靈は罪惡の素質に非ず。心靈顯現する時は、一切の意志及び感情は恩寵に依りて靈化し、此に於て生死即涅槃、煩惱即菩提の理顯はる。

主我中心を轉じて眞我中心と變易す。故に罪惡の種子未だ有すれども、罪惡の根本

たる主我已に眞我に降伏せり、眷屬豈に伏せざらん。
　主我滅殺は恩寵による。情操轉換し如來に歸命して我全幅を投したるは消極方面
融合は正しく大我に合一の積極にして、情操轉換大我に安立す。此に於て融合は實
在的に致一して主我を轉じて眞我となり、更生して法王子となす。

四正勤

一、未生惡令不生
二、已生惡令滅
三、未生善令生
四、已生善令(增長)

　四正勤とは邪道を破し正道の中に勤行す。故に正勤と名づく。
　今念佛三昧を修し見佛を期す。
(正　定の信念を爲して（　）懈怠及び五蘊等の（諸の雜行の）諸〳〵の煩惱の貪、瞋恚
睡眠、掉擧、疑の五蓋を)
　善惡の標準は如來の聖意は一切の善を攝して遺りなく、自我即ち私欲肉我は一切惡
の集る所、前に念處に於て如來の聖意と自我の罪惡を信認し、我は一切の迷妄罪惡の

淵源なれば一切の惡は此肉我よります〳〵意識的に罪惡は例へば荊棘の萠發する時は
また刺が生ぜざれども成長するに隨つて自己の刺が現ずる如く、肉欲我欲の煩惱また
性癖惡習等が刺激の緣に遇ふ每に發達す。
　成るべく卑俗情虛榮すべての卑俗の情不道德の動機を忌みて聖き高等なる聖意に契
ふ（　）一切の自分の奧に潛める佛性は念佛に依つて引起さる。一心に如來の御力を
仰ぎ（　）肉より出づる惡しき心は未萠に防ぎて生せぬ樣に、
　如來の光明を受ける時は善き（　）己が闇黑は惡非を（　）である故に、要する處
は益〳〵信心增長する處に共信樂心の退轉せぬ爲に常に念佛して心々相續し步々に心光
の中に向上せんことを願ふ。之を正勤となす。
　十住毘婆娑偈に已生の惡法を斷することは毒蛇を除く如く、未生の惡法を（　）け
流水を防ぐが如し、已生の善を增長するは甘果(菓)に漑ぐが如く未生の善を生ずる爲
には木を鑽つて火を出す如くせよと。

善惡未生已生

　兩者は一切肉我と靈我との生命、此未生已生の生は全生命の生にて、肉我は一切惡
の根本、是動物我、若し此を恣にすれば惡として作さゞるなく天然素朴の間は善惡と
もに未だ萠發せず本性に(近)く、人は肉ある限りは即ち三惡四趣の惡を性具する故に
緣に隨ひ業に循ふて善惡共に發展して兩者また主我的意識的に成らざる間は善惡共に
未だ責任を認めず、主我意識自ら善惡の意識するやうになつて初めて責任となる。
　肉我を恣にすれば世の惡緣に遇ひ漸〳〵に惡が發達すれば全生命人格が罪惡格と爲る
まで（今）は全生命何れに向つて萠發すべきやの分岐點である。肉我の愛欲に隨へば
肉に煩惱の本能伏在し外に種々の惡に誘惑し青年を墮落させる青樓遊客酒肆等の誘惑
機關あり。また世俗的名譽權利等の虛榮利己心を增長せしむる緣あり。實に宿福淳
厚に非れば端なくも青年の可惜精力を惡非の方面に濫費し全生を墮落するが如きあ
り。

また然れども人々靈性あり。奥に伏す。此佛性は完全圓滿なる佛に成り得らるゝ本能である。奥に在るが故に最貴重なる寶物が寶庫の中に寶箱に納め在るが如く、秘藏せる寶物の如くに秘藏せり。之を開發するは秘密の鑰を以て開くにあらざれば顯示し難し。

また善性は稻苗の如く、惡性は雜草の如く自然に繁茂し易し。能く注意し全力を注ぐに非れば惡の草を芸り善の苗を長養するは易からず。

肉には共通の煩惱ありてまた個々特殊的の性質あり習慣性遺傳的の性質あり。若し善の靈性が開發すれば靈我が自己の主人となりて正知見の光明を以て自己のすべての弱點を自覺して之を指導して（

靈我を發生せんには、靈我の大親なる彌陀の慈光に接せざるべからず。此に於て念佛三昧心行の要おこる。

四神足

欲念進慧

欲者希向慕樂して彼法を莊嚴す。

彌陀に過はざれば自己の最終の目的を達すること能はず。故に彌陀を愛樂慕念して忘るゝなき心を養ふに如來を愛樂し欲求する者は幸なり。此人は如來に愛念同化せらるればなり。行者此如來を愛樂の心を養はんには、彌陀を愛念する善知識に接して懇に（）自己の信樂心の增長を一にせよ。

如來は眞理なり。

我らは本理想卑しく欲望また卑劣なり。唯己が肉我と肉欲樂を追求めて故に人格を墮落せしむ。靈の我は理想も高等にして其望もまた遠大なり。諸の賢聖は其理想も高尙なる故に宇宙最高なる如來を愛し聖意に契はんことを欲して、其欲望の動機から爲

すことは、人格を向上せしむ。

如來を深く愛する故に如來を見んと欲し聖意を得んと欲して止まず。

愛慕欣欲の心深きが故に一ら如來を繼念して常に捨てること能はず。如來なる聖き慈悲萬德の聖心を念ずるが故に自己の心もます〳〵靈性が萠發して自己の奥なる靈性と如來とは性質等しきが故に彌陀に接觸せんと欲して念々に捨てず。

精進。靈に接せんとの念より、勇猛に精進し心々己を責め身を刻して己が罪業の甚深なることを悲しみ、身命を顧みず一心に專精に如來の光明に己が覺醒せんことを努力す。念々に精み歩に進みて（　）

慧。己が雜念忘想の爲に虛しく心力を勞し世間不眞實の樂の故に精力を徒費するの愚を算量し、善巧に如來の心を獲得すべき見佛の方便を覺りて一大事の目的を達せんとす。

慧。巧慧なるものは其機頻に隨つて其趣を異にす其道に(覺)り易し。盜人は盜賊の業に巧にまた覺り易きが如く、常に見佛に心を用うる者は見佛の巧方便見佛に（）

欲。欲の動機は自己が靈に生れ活んとの欲である。

天然の人の欲は根本は肉の生命を愛し肉の幸福を目的として肉に活きんとする欲望を全生命の目的として居る。其欲望は動物的にして、いかに黠智は發達するとも自我を墮落せしむ。

今は靈に活きんとの欲。此欲望の動機は眞の靈我を愛するから發る。此の靈我として活きんには、靈我の親、萬德圓滿の如來を信樂し如來の恩寵によつて攝護愛育せられざれば、靈に活きることの不可能なるを信ずる時は彌々如來に歸命信順する愛樂する情は益熾になるに至る。故に此の欲望の動機は如來を信じ如來を愛樂する心に本づく。

(一)に佛を見んと欲して身命を惜まざるは佛を見んと欲するは佛に活きんとの欲で靈に活きん爲には劣等肉的の生命を犧牲にすることを、自ら甘んじて献げたる惡我の生命死して靈我の生命は生れ來る。

靈我の生命生るゝが故に如來を見ることができる。

佛を見るは自我全生命の佛に活きたる兆候である。

佛を見んと欲するには念佛三昧を以て如來の恩寵を被むりて自我の生命を復活する處にある。

之れ我れ靈に活きんとし如來を見んと欲して肉の生命を惜まざるに至るの動機である。

精進。眞實に如來を信愛し佛を見んと欲し靈に活きんとの欲望が隨つて自然に發動する者は、勇猛なる意志全力を盡して佛に觸れんと精進。此精進の精は米を搗磨せば糠粕を除くに隨つて精白と成る如く肉我の心や妄想雜念即ち肉の生活に伴ふ垢を除かんと勇猛心に念佛し彌陀に賴むのである。

念。靈に活きんとし彌陀を愛慕して忘るゝ能はざる念。

慧。巧慧。常に彌陀に觸れ見んとの念が繋る時は自ら巧慧發明す。彌陀を見んとの一の靈界の發明である。世の發明者は常に其の目的を念じて專心に工夫する。何とか機會を得て忽ちに發明するが如し。

如來を發見の巧慧忽然とし自己に涌起す。常に念頭に如來を憶念せざれば出來ぬ。

信仰要素（五正行　三心　五根）

光明威神功徳を聞く（要素なり）彌陀本質意義は上已に明せり。彌陀の本體は本不可說なり是言思の絕する處。然共衆生をして信芽萌發せしめんが爲に名詞に依て其聖德を表彰す。況や彌陀尊は聖名を以て物を利したまふ。諦に、聖名によりて其聖旨を自己の心裡に實現せんことを祈るべきので、假令彼聖名を稱するも其實現を自己の心中に祈るにあらざれば無意義のみ。其實在を證明し歸命融合安立し、靈化の性格として生活すべきことは先已に明せり。是よりはいかゞに宗敎心機を修養し開展せば之を證明し靈化の實行を獲べきやを起行門即ち倫理門に於て明さんとす。倫理に資糧位、加行位、見道修道位とす。

初め資糧位とは即ち恩寵喚起の時期なり。此信仰の素因は、不識的に神尊を憧憬し悕求せる心情に、彌陀の種子を寫象して印象し、之が元素と爲り、之を意識的に實現せんことに力めて修養するにあり。善導大師は五種正行を以て專ら修せしむ。

一、讀誦正行。專ら彌陀の聖經を讀誦し、彌陀及び依正二報の莊嚴を說明が故に之をよみ其意を解す。また心を開導し其實現の助資となるが故に。

二、禮拜正行。專ら彌陀尊を禮拜す。自尅自勵し改悛して聖寵をうけ救靈を求む。

三、觀察正行。佗の妄想亂心を離れ一心正念に彌陀の依正二報を思想觀察し、若くは相好光明に若くは智慧神聖正義恩寵を觀察して其實現あらんことを求むが故に。

四、稱名正行。一心に專ら聖名を崇め聖寵を仰ぎ聖意の自己に實現せんことを念々不捨にいのるべし。

五、讚嘆供養正行。專ら最尊の無上の光榮と無上の聖德を讚美し禮拜して罪の赦しと恩寵を請願ふ。供養とは全心を盡して最尊に捧ぐることなり。

この五正行の中に於て稱名正行を以て正業とし自餘の四種を助業とす。彼聖名を崇めて實現を祈るは最とも親しきが故に。佗は其助資と爲るが故に助業と名づく。

至心は願文の至心信樂欲生我國なり。

一、至心は眞實心なり。尊は眞理の源、至眞の體なれば、至眞至誠の心に非ざれば尊の聖旨に稱はざるものなれば、私の虛假不實の心を捨て、至誠心を以て聖意の實現と救靈をいのるなり。虛假不實の心を捨つるときは常に眞實となるなり。

二、信樂。深く信じて愛樂する心なり。尊は無限の愛を以て我等を愛したまふ。是に對ひ奉るに全心を竭し力を盡して尊を信じて愛樂したてまつりて常に憧憬して忘るゝことなきにいたる。

三、欲望。至善なる尊は我等が已に罪に亡びたるものが望をたゝんことを哀みて、法藏を示現して我らを救ふべき約束をあらはし、不取正覺の誓を以て望をおこさしめ無限生命と聖寵とを必ず與へられんことを望み奉る。また彼尊の補處を望み上る。

信仰根

已に尊號によりて性質意義を解領しぬれば、既に聖種を下したるなり。彼神尊を愛慕し萠芽微しく萠發せんとするは信根。

信根。いかに信ずべきや。正に信ずべし。我等佛性本彌陀法身より賦せられたるが故に元善なり。無始已來乖離して自ら煩惱の垢穢に覆ふ。あへて罪惡深重にして生死の苦をうけ、自ら出離の緣あることなしと。尊は我等を罪の中より救濟せんが爲に、法藏と現じ、一切を普く救はんが爲に、誓願を立て、淨土の門を開き、此一門よりして一切を度脫し靈化せんことを誓ひたまふ。我らこの誓願を信じて、疑ふことなく、決定して深く信じ、御名を崇め、眞心深く信じ、愛樂し、望を專にすれば、必ず復活し更生して、眞の光と眞の生命となり、救靈せられんことを信じて疑はじ。深く信念祈禱して信根を養ふべし。信根已に成じなば信力を發達して信力を成ず。

精進根。專精なれば餘事を交雜えず進趣す。自己の心は垢穢なり。雜心亂想なれば悉く捨つべし。彌陀に專精なるべきこと、摩尼の珠を琢磨する如く、垢穢甚しく除

き難し、最とも砕勵するにあらざれば心光顯はれ難し。尊に無量の德光あり。益々進むときは益々光を獲。

念根。念とは繼念して忘れざることなり。經に其心の戀慕するに因つて便ち出で爲に說法すと。專ら彌陀愛慕に凝神して念頭に捨つることなき。楞嚴に『十方の如來衆生を憐愍して、母の子を憶ふが如し。若し子逃逝ば憶ふと雖ども何かせん。子若し母を憶ふこと母の子を憶ふ時の如くなる、母子生を歷て相違( )せず。衆生心に佛を憶ひ佛を念ずれば、現前當來必定して佛を見る。佛を去ること遠からず。方便を假らずして自ら心開くことを得。香を染る人身に香氣あるが如し。此則ち香光莊嚴と名づくと。念根已になり之を發達する時は念力と云ふ。

定根。一心なり。意思を統一して一に彌陀に致すとき心寂靜にして、水澄淨にして月影を映ずるが如く、一心專注にして深く朗なるときは佛を見る。

妄想散亂の意を捨て彌陀三昧の意に注す。覺想漸く微にして三昧に入り、心水湛然凝住するとき、彌陀の身心定心の水面に映現す。

慧根。よく簡擇して、自己の妄想分別を簡びのけて、巧みに彌陀の身心を把拄して正觀分明にして是と非とを決擇す。正觀分明とは、三昧の中に感覺的には光明相好等を巧みに觀察し思想し、抽象的には神靈態恩寵正義等に於て諦かに觀察し、明鏡を執つて自ら面像を見るが如くならん。心の垢穢を除きて觀察明了ならしむ。

昭和二年五月廿八日印刷
同　三十日發行
誌代　年七冊壹圓貳拾錢(郵稅共)
年拾貳冊貳圓(郵稅共)
編輯兼發行人　山崎辨成
東京市小石川區茗荷谷町九八
印刷人　小林七太郎
東京市小石川區水道端二ノ四四
發行所　ミオヤのひかり社
振替東京六六八一番